

文京学院大学 2019 年度入学式

2019 年 4 月 2 日 東京ドームシティホールにて

## 学長告辞

桜花爛漫たる陽春の本日、文京学院大学に入学された学部生、大学院生の皆さん、ご入学、誠におめでとうございます。また今日まで、ご子息・ご子女を育てこられたご両親あるいは保護者の皆様にも、心よりお祝いとお慶びを申し上げます。

さて、昨日、新たな元号「令和」が発表されました。その意味では本日入学式を迎えられた皆さんにとって、忘れられない入学式になったのではないのでしょうか。

ところで、私立大学には「建学の理念」というものがあります。すなわち、大学を創立した創立者は、どのような理念で大学を設立したのか、どのような学生を育てたいと考えたのか、どのような人材を世に送り出したいと考えたのか、という理念が必ずあります。本学の建学の理念は「自立と共生」です。

本学は、大正 13 年に創立者・島田依史子先生によって創立されました。前年の大正 12 年に関東大震災が起こり、何の技術を持たない女性たちが苦勞するのを目の当たりにして、如何なるときも男女に関係なく自立できるようにと、創立者・島田依史子先生は「女性に自立の力を」という建学の理念を掲げて本学を創立しました。この時、島田依史子先生は、まだ 22 歳でした。それ以降もその精神を継承しつつ、常に時代の先を見つめながら、「女性」から「人間」へと視野を広げ、今日では人間としての「自立と共生」を建学の理念として教育活動を展開しております。現在は、東京に本郷キャンパス、埼玉県ふじみ野市にふじみ野キャンパスがあり、外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部、そして大学院としてそれぞれ研究科が設置されています。

本日のこの入学式には、ラトビア共和国のダツェ・トレイヤ＝マスイ特命全権大使閣下にもお忙しい中、ご臨席をいただきました。ラトビア共和国は、各分野で女性が大活躍されており、その点ではヨーロッパを牽引しております。

ラトビア共和国と本学とのつながりは今から 4 年前の 2015 年 3 月に遡ります。本学は開学以来、学生を中心に据えた教育を行って参りましたが、現在、本学は「教育力日本一」という理想を掲げ、その象徴として、2024 年文京学院創立 100 周年までの長期プログラムである「新・文明の旅」を企画・実施しています。このプログラムはユーラシア大陸を東ヨーロッパから中国そして朝鮮半島まで、3 年に一度、2～3 週間の行程で 2～3 か国を訪問し、それぞれの国の文化や風土に触れ、同世代の学生と交流し、多様な文化や歴史を学ぶとともに、学生が日頃学び、見に付けた事柄を伝え、交流するというものです。第 1 回目は 2012 年に実施され、トルコ・ブルガリア・ルーマニアを訪問、第 2 回目はポーランド・リトアニ

アそして本日ご臨席いただいているラトビアの3ヶ国を訪問しました。ラトビアではラトビア大学を訪問し、本学の学生が「捕鯨とメディア」といった4つのテーマで、プレゼンテーションを行いました。一方、現地の学生は「歌と踊りの祭典」など同じく4つのテーマで自国の文化について映像を見ながら紹介するという有意義な交流ができました。また、ラトビア訪問に当たっては、ラトビアの駐日大使館の皆様にも多大なご協力をいただきました。更に、昨年11月には「ラトビア、融合の建築」と題する展覧会が本学で開催され、そのオープニングセレモニーには大使閣下にもご臨席をいただきました。後ほど閣下より皆さんにご祝辞を頂戴する予定です。この他にも、本学は時代に即応した様々な実践教育の場を提供しております。また、学部横断型グローバル人材育成プログラム「BUNKYO GCI」の活動の一環として、例えば、本学とロンドン芸術大学との協働プログラム「KAWAGOE Wayfinding」では、埼玉県川越市の魅力を世界に発信していくためのフィールドワークが行われております。

また、埼玉県岩槻人形協同組合とのコラボレーションによる「伝統工芸活性化プロジェクト」では、日本の伝統技術を今のニーズに結びつけた新たな商品を開発して、学生のアイデアを社会に還元するというプロジェクトも行われております。そしてこれら社会に直結した実践教育の拠点として、昨日「まちづくり研究センター」（通称：まちラボ）が本郷キャンパスにオープンしました。

先ほど述べました「教育力日本一」とは「社会に触れ、社会とともに歩き、社会を変えられる力」であると私たちは考えています。「学び」とは「社会生活に適応するための知識・教養・技能を身に付けること」と定義されておりますが、その適応すべき社会が今、大きな変革期に差し掛かっています。AI技術、少子高齢化の進捗に伴う社会の変化等々、差し迫る社会改革をきちんと理解し、対応できる能力を身に付けることが、現代における教育の目的であるといっても過言ではありません。どうか、新入生の皆さんはこれら社会と学問を結びつけた色々なプロジェクトや、長期や短期の海外留学、インターンシップにも積極的に参加してください。

つぎに、お手元に會津八一先生の「学規」を配布させていただきました。會津八一先生は歌人、書家として知られていますが、郷里の新潟から上京した受験生を自宅に預かり、面倒を見ました。そして彼らのために定めたのが、「学規」です。受験生向けの四則ですが、その内容は、勉強時間の決まりでも勉強法のアドバイスでもありません。人生を愛し、教養を深めることが大事だと教えています。前学園長の島田和幸先生は新入生の人生を、少しでも豊かなものにしてほしいとの願いを込めて、毎年、新入生にこの「学規」を贈られました。

「人間の条件」などで知られる映画監督の小林正樹氏は、中国大陸に転戦している間、いつもこの「学規」を朗唱していたと言います。

その四則ですが、第一に、「ふかくこの生を愛すべし」、島田和幸前学園長はその解説の中で「生。いのち。生命。どんな金額をもってしても購<sup>あがなう</sup>うことの出来ない人間の尊いいのち、

私たちは今、それを授かっています。生を受けたありがたさに勝るありがたさはこの世に存在しません」と言われております。今日までの数々の偉大な人類の文化遺産は、すべて人間が作り出したものです。皆さんはこれからの人生を生きていくためにも、大志を抱き、夢を描きながら、自らを磨いていってください。それが生を愛するということです。

第二に、「かへりみて己<sup>おのれ</sup>を知るべし」、これは「この世の中で最も大切な人・・・とは自分自身です。しかし、真の（自分の）姿はなかなかわからないものです」しかし、他人が自分のことを知らないからと言って嘆くことはありません。憂えなければならぬのは、自分自身が自分のことを知らないということです。すなわち、人間が成長するための第一の関門は己を知る、自分自身を知ることが大切であるということです。そして自分自身を知るために大切なことには3つあると島田前学園長は言われております。すなわち、「責任感、自立（甘えを捨てる）、そして他人への心配り、ということであり、この3つが出来ているだろうかと常に考え、未熟なことを自覚し、自省する、これが省みて知るべき己についてのポイントである」と述べられ、「そこから、この世に己自身が存在しているという尊厳をふまえた、進歩伸展の謙虚な営みが始ま」と言われております。

第三は、「学芸を以って性を養ふべし」、「養う、とは栄養を与え磨き育てること・・・で」す。

学芸とは、学問と芸術のことで、絵画、詩、その他あらゆる意味での美の創作表現や、文化的活動の所産のすべてが私たちの心の糧となり、これらが、個性豊かな人間をつくりあげる根底であると言われております。皆さんは学生時代、勉学が中心となりますが、その上で絵を描いたり、見たり、詩を作ったり、小説を読んだりして、心の本体を養うことにも精進してください。

第四は、「日々新面目あるべし」、この点について、前学園長は「外面が日ごとに変化してゆくように、人間の内面にも、日々新たな伸展つまり新面目がありがたいものです」「知識を土台に、心が生み出してゆく知恵には果てしがありません。それと同様、今までとは違う新しさを持ちたいと願う人間の心は無限に展開し得るものであり、若さと進歩の象徴でもあります」と述べられています。日々新たな気持ちで毎日を過ごしてください。

以上が、皆さんに配布した「学規」の四則に対する島田和幸前学園長の解説の一部です。どうか後ほどさらにじっくりと何度も読み返してください。

最後に、皆さんに継続することの大切さをお伝えしたいと思います。江戸時代中期に杉田玄白と前野良沢というオランダ医学を修めた医者がおりました。2人はオランダ語で書かれた『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、『解体新書』と名付けました。わが国で初めての本格的な洋書の翻訳と言われております。しかしその『ターヘル・アナトミア』を手にしたとき、2人とも全くその洋書を読めなかったようで、3年の歳月をかけて訳したそうです。

4年あるいは2年間という学生生活は短いと言えなくもありませんが、何か一つのことを成し遂げようとするときは決して短くはないということです。

どうか、皆さんはこの4年間あるいは2年間、是非、何か明確な目標を掲げて、それに向かって進んでください。

結びに、現代のグローバル時代を力強く生き抜く力を身に付けるべく、有意義な学生生活を送ることを念願し、告辞と致します。本日は、誠におめでとうございます。

2019年4月2日

文京学院大学

学長 櫻井 隆